若気のいたり

宝　あい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
若気のいたり

【Ｎコード】
Ｎ６６７６Ａ

【作者名】
宝　あい

【あらすじ】
【※私の実話を元に書きました※】人名は変えています。過去から現在に至るまでのお話。出会いや別れ、友情や不倫、結婚に出産。色々あったけど、人生一度きり。見て損はないはず！

第一章：彼氏がいて出会い系サイトにはまる

２００Ｘ年　０７月１Ｘ日

ピポパ…ピピ…ピポ…

私は携帯の出会い系サイトにハマっていた。

以前まで怪しいから見る事すらなかったのに…

「暇な子メールちょうだい☆」

「会える方いませんか？」

「セフレ募集！」

こんな書き込みが次から次へと増えていく。

私：いまいち良いのないな～…写メも微妙ばっかり～はぁ…

私には、遠距離恋愛の彼氏がいる。

彼は年令２２歳で整備関係の仕事をしている、たかよし君。

たかよし君とは、私が高校一年の時知り合った。

私は高校二年で中退、プー太郎をし、その後カラオケ店と飲食店を掛け持ちしていた。

もちろん私が出会い系サイトをしている事は知らない。バレたらどうなる事か…

たかよし君は束縛、暴力がすごい。化粧、スカート、バイト代は俺に貢げ、常にメール、喫煙、友人宅へのお泊りも激しく怒鳴る程だった。

別れをきりだす事すら恐ろしく、ただ時が過ぎるだけだった。

私が出会い系サイトをするようになった理由は、優しさと性欲の二つ。

そうしてる間も、恐怖の週末はやってくる…

週に一度、たかよし君と会っても楽しい事はなく、お決まりのように朝はゲームセンターのスロット。昼食を済ませた後はパチンコ屋。夕方はラブホだった。

ギャンブル嫌いな私には、そんな週末が苦痛だった。私は、仕事だと嘘をつき会う事を控えた。

第2章：達也君との出会い

そんなある日の晩。

出会い系サイトに、良い感じの男性を発見した。
名前は達也君、年令２０歳。フリーター。

歌手：ケツポイシのメンバーにいそうな感じの人。
古着で、優しそうな感じだ。

書き込みには
「達也です。いつでも暇してるのでメール下さい☆」
と書かれている。

私は、どうせ遊びだし良いや！と思い、
「初めまして！さちです☆書き込み見ました、良かったらお返事下さい（＾Ｏ＾）」
と、サイト経由でメールを送った。

すぐに、達也君から返事がきた。

達也：返事ありがとう！さちちゃんはセフレに興味ある？

直球だった。

さち：こちらこそ返事ありがとう☆んーないかなぁ…達也君は彼女いるの？

達也：彼女は最近別れたよ、マンネリかな。同棲までしたんだけど

ね。さちちゃんは？

さち：そっかぁ…変な事聞いてごめんね、さちは彼氏いないよ☆
なぜか嘘をついてしまった私。

そこから色々会話をした。
達也：良かったら、メルアド交換しない？

さち：いいよ、達也君教えて。さちから送るから！

そしてメルアドと番号交換後、日曜日に会う約束をし、その日は終わった。

それから何日後、たかよし君に日曜日は両方のバイトだから会えないとメールをし、達也君と約束した日曜日がきた。

たかよし君には、行ってきますと、事前にメール。
達也君の家は遠いので、途中の駅のホームで夕方待ち合わせ。

達也君に電話。

さち：着いたよ、今どこに居る？

と振り返った先に携帯をもった男性。
達也君だった。

そして私達は、そのままホームを出て飲食店へ。

会話が弾んだ頃、達也君が
達也：今からラブホ行けへん？

さち：うん、いいよ。
私は自由になりたい一心で答えた。

ラブホへ行って、帰りに、また会う約束をして私達はバイバイした。
もちろんたかよし君には、今バイト終わったと言った。

そこから時が流れ、たかよし君とも何回か会ったが、何もなかったかのように過ごした。今思えば、かなり最低なオンナだ。

そしてまた、達也君とメール。

会う約束をした。

第三章：達也くん続き

その日は水曜日、夕方会う約束をした。達也君はフリーターだから、平日でも会えるのだ。
平日に男性と会うのは久しぶりで、達也君家で遊ぼうと話が決まった。

もちろんたかよし君には、飲食店の方のバイトだと嘘をつき、今から行ってくる！と事前にメール。

達也君は一人暮らしで、彼女と別れてからは、コンビニ弁当ばかりと聞いていたので、近くのスーパーで材料を買って行く事にした。

達也君は、途中まで迎えに来てくた。
向かう途中、元カノの話や友人の話など色々してくれた。

達也君家に到着。

達也君家は、ハイツで、やはり一人暮らしのせいか、部屋は散らかっていた。

部屋をかたずけ、料理開始。今日の夕食は、冷やし中華と豚キムチ。

達也君はマジで美味しい！っと言ってくれ、ペロリと完食。すごく嬉しかった。
こんな気持ちは久しぶりだった。

食器をかたずけた後、テレビを見ながら私の学生時代の恋愛話になった。

中２の時の彼は私より一つ上の翔太郎君と言う。

告白され付き合い、初体験、お互いヤンキーの道へ。夜中遊びまくりで、最終的に浮気＆振り回され中２の冬フラれた。

中３の夏に付き合った彼は翔太郎君の同級生で、さとる君と言う。

彼は真面目で、ピアス開けるたびに怒るような人だった。
その彼とは初ラブホ、初めて男性に手を上げられた。最終的に中３の冬フラれた。
そして高校一年の時に寄りを戻したいと言われた。
私にはすでに整備関係の仕事をしている、たかよし君（この小説に初め登場する人物）と付き合ってると言い、さとる君を振った。

そこで初めて彼氏がいると達也君に話した。

何とか高校へ入れたが、私はレディースに入り荒れて中退。
プー太郎の日々が続き、そして今、カラオケ店＆飲食店で働いていると。

達也君は、ツッコミながらも話を聞いてくれ、私に

達也：俺、さちが好きや！付き合おう！

さち：ごめん。

達也：何で？！

さち：たかよし君とすぐに別れられへんかもしれん…

達也：それでも良い！

私は答えることができなかった。まだ達也君の事好きになってなかったし、この状態が良かったからだ。

私は欲張りで、最低なオンナと分かっていたが、決断ができなかった。

結局そこから気を取り直し、会話する内に良い雰囲気へ。

私はまた達也君としてしまった。

帰りのホームで、考え直したら連絡ほしいと達也君に言われた。

私の中ではもう決まっていた。

自宅に着き、たかよし君に帰ってきたと報告。

そして私は、メルアドを変えた。

それから達也君から連絡は来なかった。

第四章：別れと出会い

ある日幸運が舞い降りた。
たかよし君に冷たくしていたある日の晩、別れをきり出してくれたのだ。

私はチャンスだと思い

さち：分かった。今まではありがとう、ごめんね、私より良いオンナ見つけて下さい。ありがとう。

たかよし：おう。こちらこそごめんな、あんな、俺オマエに黙ってた事あるねん。

さち：何？

たかよし：あんな俺浮気してたんやんかぁ、相手は人妻で、旦那と別れて俺、正式にその人と付き合う事になってん。黙っててごめん。

正直ビックリした。もっと早く言えよ！と
なぜが、これでやっと解放される…と。

私は自分がした過ちは言わず、そのままオメデトウと言い、たかよし君と別れた。
それから私はまた出会い系に。

昔からの男女親友ともご飯食べたり遊んだりする日々が続いた。（親友なので変な行為はありません）

ある日の晩、サイトでタイプの男性を発見した。

名前は聖也君、年令は２６歳。接骨院の仕事をしている。

写メで見た限り、歌手：福山まさるをギャル男っぽくした感じだ。

書き込みには

「癒してくれる子募集！」

と書いている。

私は即サイト経由でメールを送った。

私は新しい恋を掴む為に頑張るぞ！と思い

「初めまして！良かったらメール下さい☆返事はいつでもいいです！」

と送信。

次の日の昼間。

聖也：初めまして！返事ありがとう☆今、僕休憩中なんだけど、さちちゃんは？

正直

「僕」

と言う言葉にビックリした。

私の周りでは目上の人には僕や私って使うけど、それ以外で

「僕」

という言葉はあまり聞いた事がなかったからだ。

私は、その日休みで寝起きながらにも返事を返した。
さち：こちらこそ返事ありがとう！聖也君は、今メール大丈夫？さちは、今日休みで今起きたとこ（笑）
聖也：大丈夫だよ☆さちちゃん今日休みなんだっ起こしてしまったみたいでごめんね！
そんな会話が続き、昼メイン、夜少しだけメールする日々が続いた。
そんなある日の昼間。

第5章：聖也君と

さち：聖也君、今週土曜空いてる？

聖也：朝から夕方は仕事で、夕方から、勉強会あるけど、八時以降ならいけるよ☆

さち：しんどくない？いける？

聖也：大丈夫☆これでも体力には自信あるよ！明日休みだしね～

さち：じゃあ、さちが駅まで迎えに行くから遊ぼう！

聖也：いいよ☆僕もさちちゃんに会いたいし！僕が迎えに行こうか？

さち：ううん！少しでも早く会いたいから、聖也君が終わる時間に合わせて、さちが迎えに行く☆

他にもたくさん、こんなメールを土曜まで交わし、聖也君との約束の日がきた。

駅のホームを出てすぐの所で待っていると、聖也君から連絡が。

しかしなかなか会えない。

その駅は、すごく大きくて東出口、南出口やらたくさん出口が会ったからだ。

聖也：今、東出口にいるけど、さちちゃんどこ？

さち：えっと…ゲっ！今、南出口！閉まってる薬局の前！

聖也：今から向かうから待ってて！

結局３０分ほど、人の多さと、広さでなかなか会えませんでした。

そしてやっと会えました。

そこから道路を挟んで目の前のビルの中の飲食店へ。

色々会話して、すごく楽しい時間。

そして店を出た時

聖也：今から帰る？帰るなら、タクシー呼んでタクシー代渡すけど…

私は、えっ？帰りたくない！と思った。

さち：このまま一緒にいよ！

（とっさに口から出てしまった…）

聖也君はそのまま、どこかで休憩しようか？と言い、タクシーを呼び、ラブホの近くまで行った。

聖也：ここにする？

さち：うん

ラブホへ入りテレビ：恋のかみ騒ぎを見た後、お風呂に入った。

その後、良い雰囲気に。

結局してしまった…

その後、眠れず二人で朝まで話こんで、朝一で喫茶店に。

聖也君のお家に行きたいなっと私は言ったが、聖也君は寮に住んでる為、行けなかった。

さちがいる所から聖也君の実家は電車をたくさん乗り継ぎしないといけないぐらい遠い所。

夕方、聖也君は弟の所へ行かないといけないって言っていたので、ブラブラして食事した後、駅まで手を繋いで聖也君を見送った。

それから毎日、昼と夜メールする日々が続いた。

聖也：好きだよ、さちちゃん

さち：私も聖也君がすき！

そんな会話ばかりが続く。でも、聖也君は付き合おうとは言わなかった。

なんとなく、私も言わなかった。好きでいてくれるだけで十分！欲を言えば付き合いたいが……

私は、聖也君とは毎週会えない。何故かと言うと開業する為、その分野の国家試験があって日々勉強しなければならないからだ。

私はあっさり信用して、我慢した。

そんなある日。

聖也君が日曜日遊ぼうと言ってくれた。私は嬉しくて前日まったく寝れなかった。

そして日曜日。二人でランチして動物園へ。

すごく楽しい時間。こんな気分になれるなんて考えてもみなかった。これが幸せなんだなって……

この先、どん底に突き落とされるとも知らずに…

第六章：幸せと戸惑い

それから私と聖也くんは、町を散歩したりデパートに入ったり。楽しい一時を過ごしラブホへ行き、駅まで手を繋いでバイバイした。

そこから連絡だけの日々、二週間くらい会っていなかった。

私は淋しくて仕方なかった……

でも我慢我慢！そう自分に言い聞かせ

淋しさを紛らわす為に、できるだけ一人にならないように友達と遊んだり、バイトに集中した。

そして久しぶりに会う約束をした。

華の金曜日とゆうように、私からすれば華の日曜日だ！

その前日、結局眠れず…無睡で会いに行くことになった。

日曜日

満員の電車の中、急いで聖也君の元へ向かった。

相変わらず男前だ。

どうしてこんなにカッコよくて優しいのに、彼女いないんだろう…

サンタッキーへ食事しようと決まったので、その時聞いてみようっ！と私は思った。

店内はカップルらしき人達が多い。

二人で食べながら色々話をしている中、私は

さち：聖也君、男前で優しいのに何で彼女おらんの？わんさかオンナの子寄ってけえへん？

聖也：笑、寄ってこないよー！　俺よりも弟の方がモテるよ！英語喋れてよく話すしね！

私は、寄ってこないって言うのは嘘だと思った。

聖也君は友達が多い。

以前聞いた話では、超太ってるオンナ友達がいて常に痩せろと言っている事や
出会い系サイトで何人も遊んで捨てた、などなどだ。

そして聖也君には、妹もいる。

えっ？そんなの今さら知りましたよ！と私は思った。

写メを見せてもらった。
ハーフっぽくてすごく綺麗な人。
もう結婚していると聞いて更にビックリした！

そんな会話をしながら食事を済ませ、ベンチで二人煙草を吸いながら次に行く場所を話合った。

聖也：何もしないからラブホ行かない？なんだか落ち着かないからっさち：うん、いいよ☆彡

そしてラブホへ向かった。

今日の聖也君は何故かオカシイ。いつもより優しいし、いつもより喋らない。
何かあったのかな……

私はそんな事ばかり考えていた。

ラブホへ到着。

薄暗い部屋で何だか気まづいムード…

布団の上、二人横になっていると聖也君が重い口を開き話し始めた。

第七章：残酷な真実

聖也：僕は、さちちゃんに言わなあかん事がある

さち：うん

（オンナでもいるのかな…まさか…っ　告白かな…）

そんな想いがが５：５で頭の中をかけめぐる

聖也君の発言は、私のまさかっ！と思った予想をはるかに越えていた

聖也：僕な、寮に住んでるってさちちゃんに言ったやん

さち：うん

聖也：本間は寮に住んでなくて、オンナの人と一緒に住んでる。

さち：うん

頭は真っ白になったが、まぁこんな事もあるだろうと自分に言いきかせた。。

聖也：最低な男でごめん

さち：ううん

何故か私は冷静だった。
多分あまりにも衝撃的すぎて、返事しか言えなかったんだと思う。

聖也：本間にごめん。さちちゃん本間ごめん。ごめん

聖也くんは土下座してまで何度も謝り

聖也：もう一つ…

さち：うん
（何で私はこんな目にあうんだ？とか、まだあるのか？！と……）

聖也：これ見て。

渡されたのは免許証。

私は意味がわからなかった。でもよく見ると、生年月日がおかしい。

私は携帯を取りだし、苦手な計算をした。

すると……

教えられた年令と計算が合わない…

聖也君はだいぶサバをよんでいた（「□」；）

本当は３１歳。５歳もサバをよんでいたのだ。

３１には見えない…

だからは私は騙されたんだと思う。

１．２歳ならまだしも５歳嘘とは…

まぁまぁこんな事もあるだろうと…

そして聖也君は

聖也：本間は今までの子みたいに言うつもりなかった。
でも、さちちゃん本間に良い子だったから、隠してられへんかった！
これ以上騙し続けたくなかった！
軽々しく嘘でも付き合おうなんて言われへんかった！本当にごめんなさい！

私は胸が痛くなった。
私の事を良い意味で言えば、大切に想ってくれてる
（その人と別れて、キッチリしてから付き合うのかな？と）
悪い意味で言えば、その人一筋。

お互い好きって言いあってたから、良い意味なんだろうと私は思ったが、甘かった……

聖也：その人とは、だいぶ前から一緒に住んでて４０歳近い。
福祉関係の仕事をしていて、僕が働き初めでお金がない時、生活費だしてくれたり色々助けてくれた。

もう恋愛対象じゃなく、家族って感じで……
彼女と別れるっていうか離れる事はできひん。

開業資金１０００万円かかるんだけど、それも出してくれるって言ってるし、今までの恩もある。

居て当たり前になってる。それはさっき言ったように、僕の中ではもう彼女とかじゃなく家族って思ってしまってるから。

僕はすごくズルイ人間やと思う。僕はこんな人間や。本間ごめん。

私は黙って聞いてる事しかできなかった。
色んな思いが脳裏を駆け巡る。

さち：聖也君、話してくれてありがとう。
聖也君は謝らなくていいよ、聖也君は悪くない。

なぜか涙が一粒流れ落ちた。

聖也：僕の為に泣かないで…もっと怒りをぶつけていいだよ！

私には、聖也君の勇気と覚悟が痛い程伝わってきた。

少し落ち着く為に、二人で部屋の飲み物を飲みながら煙草を吸った。

テレビをつけるとサザイさん。

落ち着いた後に込み上げる思いは、今までの疑問だった。

さち：聖也君、昼は仕事場でメールできるけど、夜少ししかメールしてないけどバレてないの？

聖也：携帯はお互い絶対見ないし、いつも彼女がお風呂の時にメールしてた。

さちちゃんと夜する電話は、勉強会終わって家に着くまでの間や、ビデオ屋に借り・返しに行く時、煙草買いに行く時にしてた。

さち：そっかー、じゃあさちと日曜とか土曜泊まりで遊んだ日は何て言ってたん？

聖也：友達と遊んでくるとか、実家に用事で帰ってくるとか嘘ついてた。
だから、毎週毎週遊べなかった。バレかけた時もあったし……
勉強しないといけないのは本当やで！

さち：うん。勉強会で友達と話してた時の事、前に言ってたもんね、

でも、奥さん聖也君の実家に電話したりしないの？

聖也：うん、実家には絶対電話こないよ、親知らないから…

さち：何で？

聖也：僕の親はクリスチャンで、キリスト教の人しか結婚は許してくれないんだ。
お婆ちゃんはクリスチャンじゃなくて、父親が勝手に始めた事。
妹は親の言い付けを守ってクリスチャンの人と結婚したけどね。
親は、僕の彼女を知らない、だから電話は確実ないよ。

さち：そうなんだ……。じゃあお金は？

聖也：何とか切り詰めてやってるよ、ある程度彼女に渡して、それ以外は僕の小遣いだから。

さち：聖也君、もし今の彼女と結婚するって言ったらどうなるの？

聖也：親と縁切ることになる…

さち：そうなんだ。さちは、付き合ってとか言わない。彼女を大事にしてあげて、

聖也：さちちゃんはそれでいいの？僕が決める権利ないから…

さち：う…ん…彼女の事考えると、さちは身を引いた方が良いって思う。
私が聖也君の彼女の立場なら、
私と聖也君の関係知らないけど、
絶対すごく辛くて苦しいと思う。

本当に大切にしてあげてほしい。
無理に聖也君を奪おうなんて思わないよ、

私はきっと、聖也君の事をそこまでしか好きじゃなかったのかな…と少し思った。
でも心の奥底では、本当にこれで終わりでいいのだろうか…と悩んでいる自分もいた。

結局そのまま二人でラブホを出て、万が一を考え、わざと少し離れ

て駅へ向かった。

駅周辺の交差点で、聖也君は

聖也：手つなごう。

さち：もし聖也君の彼女に見られたら……

そんな事を言いながら手を一瞬だけ繋いだ。

駅の改札口でお互い顔を見つめ、何も言わずに私はその場を去った。

一人になると、考えたくない事まで考えてしまう。

私は疲れて頭が真っ白だった…

この後、深夜に飲食店のバイトがあるのに……

時間まで後三時間程。

私は地元で大親友のチエミに、

「もうすぐ着くから駅まで迎えに来てほしい。

ちょっと話聞いてほしいねん。」
とメールした。

私はチエミに相談することにした。

第8章：友情と決意

駅に着くとチエミがいた。

チエミ：よっ久しぶり☆どうしたん？

さち：ちょっとなぁ…

私とチエミはコンビニでジュースを買い、近くの公園で話すことにした。

さち：あと二時間半後にバイトやけど、

と、私は聖也くんとの今までの事をチエミに全て話した。

チエミ：えー！まじで？！最低やん！さちはまだ好きなん？

さち：んーまだ好きやと思う…じゃなかったら、悩んでないし…

チエミ：そうやろなぁ～
でも止めといた方がいいんちがう？
絶対オンナに金があるからやって！

開業資金、１０００万も出すって言うてんやろ？
そりゃあ男からしたら、かなりオイシイ話やん！
さちの為にオンナ（金）捨てて一緒になろうとは絶対言えへんよ！

さち：やでなぁ～

私はやはり気が動転していたせいか、そこまで頭が回らなかったから、チエミの言葉は有り難かった。

チエミ：やっかいやなー…

さち：うん。どうせやったら真実言わずに、去って行ってくれればって思ったわ…

チエミ：確かに…でもまぁ、こうなってしもたから、後はサチがどうするかやなぁ…まだ正式に付き合ってなかって良かったやん！

そこから色々話し合い、とりあえず落ち着くまで聖也君と距離をあける事にした。

さち：じゃあバイト行ってくるわ。こんな気分で行きたくないけど（ー ー ー ー）

チエミ：うん、頑張りや！無理しいなや！またなんかあったら連絡して！ほなまたね！

そしてチエミとバイバイし、バイト先へ向かった。
チエミにはすごく感謝した。

バイト先に着き、着替えながら、ため息がでる。
控え室に居た男の子が話かけてきた。

その男の子は、私よりも四つ歳上の全然話した事ない人で、直斗君。
背が高く顔は美形で、ランク　アン　シエルのボーカルの子に似てる。
個性的なオーラがでていて、まさに高嶺の花だ。

直斗：どうしたん？ため息ばっかりついて。幸せ逃げていくで～

さち：うん、もう幸せないから大丈夫っ（笑）

直斗：良かったら俺今休憩やし、話聞くでっ

出勤まで少し時間があったので、大まかに話した。

話終わった頃、丁度時間が来て二人でタイムカードを押して、仕事の合間合間に話をした。

直斗君は真剣に話を聞いてくれ、

直斗：それは止めた方がいい！
俺も、さちちゃんの友達が言うように、金やと思うわ。
さちちゃんがそんな目にあってるのは、ハッキリ言って俺ムカつく。
男としてソイツは情けないわ！ええ歳して。

さち：やっぱりそうやでなぁ

そこから私の中で葛藤が始まった。

店を閉める時間になってバイトが終わり、　私は直斗君と控え室で話合った。

直斗：好きな気持ちはわかるけど、さちちゃんにとってプラスにな

ってるか？

私は確かにプラスになっていないと思った。
直斗君はすごく前向きで、一緒に話していてすごく居心地が良かった。

結局2、3時間話してお礼を言い、二人で途中まで帰りバイバイした。

私はいつものように帰り道にあるコンビニへ。

お菓子やジュースを買っていると、声がした。

パッと振り向くと直斗君！

直斗：おう！

さち：あれ？家向こうじゃなかった？

直斗：うん、今から友達の家でサッカーゲーム大会やねん！笑

さち：そうなん？！元気やなー

と笑いながら話をし、私の分までオゴッてくれた。

コンビニを出てアドレスを交換し、再びバイバイした。

次の日。

3通のメールが届いていた。直斗君だった。
私を心配してメールしてきてくれたのだ。

読んでみると、すごく良いメールだった。
3通とも千文字近い。

私は返事メールをし、すごく気持ちが楽になった。

そして決心した。

第九章：恋の終止符。発展。

その晩、私はバイト前に聖也君に電話をした。

さち：もしもし？今いける？話があるんやけど。

聖也：うん、いけるよ☆
さちちゃん昨日はごめんね、ビックリしたと思うけど…

さち：ううん。こっちこそ迷惑かけてごめん。
もう会うのやめよう。

聖也：えっ？さちちゃんはそれでいいの？僕は、好きだしたまに会いたい。

さち：さちはそれでいい。いくら聖也君がさちの事好きって言っても、彼女と別れない限り、本当にさちの事スキって確信はない。
付き合ってないのにHした私も私だけど、このまま先がないのにズルズルいっても仕方ないと思う。
彼女に悪いなっていう気持ちばかり膨らんでいく…

聖也君は黙っていた。

聖也：さちちゃんがそう言うなら…
でもサヨナラじゃなくて、友達ならいいよね？
何でも話せて相談しあえる友達…

さち：じゃあ友達ねっ

そして少し話した後、電話を切った。

私は、少しひきづっていたけど、なんだか気持ちがスッキリしていた。

聖也君との短い恋が終わった。

5ヵ月の間に色んなことがあった。

そして年が明けた。

六月は私の誕生日。友人と誕生日パーティー。

そこへチェーンメールがきた。

いつも無視しているのに、なぜかその時は、色んな子にチェーンメールを転送。

そこへ一通のメール。

直斗君だ。

直斗：よっ元気？

さち：元気だよ☆去年の恋愛相談ありがとね、

改めてお礼を言い、その日は夜中過ぎまでメールが続いた。

気付けば、毎日メールしてる仲になっていた。

私は、すでに飲食店を辞めてカラオケ店一本で頑張っていた。

そして二ヵ月が過ぎ八月。

第１０章：心の変化

さち：直斗君今日ご飯食べに行けへん？

直斗：いいよっ何処行くか決めといてな！

そして待ち合わせをし、ファミレスで楽しく会話しながらご飯を食べて、直斗君に質問した。

さち：直斗君彼氏は？

直斗：爆笑…俺、ゲイちゃうで（笑）

さち：あっ！！ごめん！（「□」；）！！彼女の間違い（笑）

直斗：笑…市内でメールしてる子はおるけど、その子なんか変わってて微妙やわ…

さち：じゃあ付き合へんねんなー。

直斗：そやなー前に一回、俺の親友キズつけてるし、気になってた時もあったけど、ただメールする仲ってかんじ。
俺、他に気になる子できたしっ

さち：そうなん？！直斗君大変やなー
気になる子できたんや！
じゃあ次こそは頑張らなあかんな！

そんな会話をして店を出てバイバイした。

直斗君は、いつもオゴッてくれる。私が出すと言っているのに……
次こそは出すぞ！と思い、直斗君に念を押してメールで伝えた。

それからも毎日メールを重ね、私は直斗君にメールで

さち：直斗君、いきなりやけど、彼女ほしい子おらん？さちの友達が彼氏ほしいって言うてるねん。
チエミっていう子なんやけど！

（チエミは以前から彼氏募集中だった）

直斗：おるで～！その子に紹介しよっか？

さち：本間にー？じゃあどうする？二人で遊ばせる？

直斗：俺らも行こやー！

さち：うんっ！せっかくの夏やし、海で花火せえへん？！

直斗：いいね～！じゃあ、六時に待ち合わせして、飯食って花火な！
曜日いつにする？

さち：ＯＫ！どうやって行く？さちもチエミも車持ってないし…
友達仕事してるん？
土曜日は？さちバイト休みで、チエミも学校休みやし☆

直斗：車はあるから心配せんでいいで☆
友達は大学生やから、全然いけるで☆
もしかしたら夏休み入ってるかもしれんし！

土曜日やな、丁度いいわー俺バイト昼までやし、友達休みやわ！

そんなこんなで話は盛り上がり、土曜日が待ちどおしかった。

そして土曜日。

チエミと一緒に、待ち合わせた場所へ。
と、言ってもチエミの家の横に建っている会社の前で待ち合わせ。

そして初対面の時…

直斗君の友達は、豊君といい、直斗君と同級生。
細身でキリッとした顔だち。レゲエライブもしている。

すごい！
私とチエミはビックリした。

そして四人でファミレスへ。

何となく落ち着きがないが色々話をして、私がオゴリ、店を出て花火を買いに行った。

私と直斗君は、後ろの席。

チエミが助手席で、豊君が運転。

私と直人君は、ある作戦をコソコソ考えた。

それは、二人を車に残し仲を深めてもらおうという作戦。

そして店に着き、買ってくるから待ってて！
と強制で二人を車に残し、直斗君と店内へ。

数分後…

作戦は失敗に終わった（◎ー◎；）

チエミの兄と、豊君は友達だった。

後で聞いた話、チエミは、兄の友達はちょっと……

豊君は、タイプじゃないと言っていたらしい…（直斗君情報）

そして３０分程、車をとばした所に海がある。

そこへ向かい、四人で電池式コンポの音楽をかけながら花火をした。

もし海にサメでてきたらどうする？っと、
アホな会話をしながら、二時間ぐらい楽しんだ後、最後は線香花火。

ゴミを拾い、帰る事に。

途中ビデオ屋に寄る事になった。

もちろん夏といえば怖い話。

私はホラー系は全てダメ。

しかし、直斗君の家で見る事になった。

ガーンと思いながらコンビニへ行き、お菓子やジュースを買った。

そして直斗君の家に到着！と思いきや、下りてみたら待ち合わせ場所。

直斗：俺の家ここやねん！

サチ&チエミ：えぇ～～～～！！

直斗君の家は、チエミ家の横に建ってる会社のすぐ横の家だった！

あまりの近さにビックリ！

そして怖いビデオ見た。

本当に怖くてチビリそうになったぐらいだ。

結局、話したりビデオ見たりで朝方になった。

そこから解散。

眠い目をこすりながらお礼を言い、私はチエミの家で爆睡させてもらった。

直斗君の事を考えながら…

私はすでに直斗君を好きになっていた。

次の日。

夕方バイトが終わり、チエミと遊んでいた。

そこへ直斗君からメール。

私とチエミと直斗君で遊ぶ事になった。

コンビニでお菓子やパン、ジュースを買い直斗君家へ。

昼寝したり（夜だけど）話してる間にもう朝方に…

チエミは学校休む予定だったので、このまま帰って寝ると……

そして二人きりになり、なぜか直接話さずに、メールの会話が始まった。

第11章：スキと憎しみ

メールの内容は

直斗：さちちゃん眠くない？

さち：うん、眠くないよ☆直斗君は？

直斗：俺も眠くないっこんなん慣れてるからっ
さちちゃん気になる子とかおらんの？

さち：んーまぁ…いちをいるよ（笑）
直斗君こそ気になる子とどうなん？

直斗：気になる子いるんや（；^_^A俺はまぁまぁかな？

さち：そっか～
あっ！気になる子おるのに、さちココに居たらあかんな（；^_^A

直斗：全然いいよ！むしろ居てほしい！

私の胸は心臓バクバクで飛び上がりそうなくらい嬉しかった。

さち：そう？嬉しい☆

直斗：俺も嬉しい！

さちちゃん！！！

さち：ん？

直斗：スキ

叫びたいくらい嬉しくて、思わず言葉がでた

さち：まじで？！

直斗：うんっ

さち：さちもスキ…（；^_^A

直斗：まじで！笑
ほんでな、俺就職決まってんで！

さち：まじで！おめでてう！！
なんかダブルでおめでたやな（＊^_^＊）笑

直斗：うん！本間に俺でいいん？！バリ嬉しい！
ありがとう！

そして私達は付き合う事になった。

次の日。

携帯がなった。

着信：たかよし君

私は出た。

さち：もしもし？

たかよし：あっ俺俺。
あのよー、俺やっぱりオマエと寄り戻そうと思うねんっ
ええやろ？お前、俺がおらなアカンやろ？

私は、一瞬にして幸せが吹き飛んだ気がした…

でも今の私は、もう過去の私と違う。

調子のるのもいい加減にしてほしいと思い、

さち：はっ？何言ってん？さち彼氏おるし。なんなん？一年も経って。気持ち悪い。オンナの人と付き合ってるんじゃないん？

たかよし：だから忘れられへんから、こうして電話してんねんっ
彼氏できたぁ？ふざけんなよ
俺様という男が居ながら！

私はブチってきて、初めてたかよし君に逆らいブチ切れた。

さち：我、黙って聞いてたら訳わからんこと言いやがって！
二度とかけてくんなよ！しつこいんじゃ！
ガチャ！

私はバイトで夜、家に帰ると母が
「アンタたかよし君って子から何回もしつこく電話かかってくんで。
」

内容は

「サチさんと寄りを戻したいので、
お母さんの方からサチさんに言っていただけませんか？」

らしい……

腹の底から恐怖と憎しみが込み上げた。

なぜ私の実家の電話番号を知っているのか？

無視していると、次はたかよし君の妹から着信…

「内容は、最後に会ってあげてほしい」

だった。

あまりにもしつこいので、市内の駅で会うことに。

最終章：解決と愛の結晶

直斗君は仕事を早めに切り上げ、少し離れた車の中で待機。

駅に行くと、すでにたかよし君が居た。

目があった瞬間涙目になり、

たかよし：お前は俺を裏切らんって思ってたのに…

私は、誰かと間違えてるん違うか？と、思わず声がでた。

そして意味不明な妄想話をされ、時間はどんどん過ぎていく。

さち：話はそれだけ？
帰るわ。もう連絡一切してくるな。
さよなら。

すると、たかよし君はいきなり立ち上がり私の顔を思いっきりビンタ。
むなぐらを捕まれそうになった。

丁度その時

私が遅い事に心配した直斗君が私の元へ。

危機一発。

直斗君は、一瞬ビックリした顔をしていたが、顔が変わり、たかよし君めがけて殴りかかった。

近くに居た駅員さんが、なんとか止めに入り落ち着いた。

そして、私達は駅員さんに謝り足早に帰ろうとした。

振り替えると、冷たい視線でこっちを見ているたかよし君。

私はもうあなたを恐れる事はない。

そう言い残し、直斗君とその場を去った。

それ以来、たかよし君から連絡くる事はなくなった。

私にはみんながついている。

男一人に振り回される、弱い人間は卒業する。

そう心に誓った。

それからは幸せな日々をおくった。

直斗君は私の過去をすべて受け入れてくれる。

私も直斗君と居れば前向きに生きれるし、プラスになる。

直斗君と出会って本当に良かった。

１２月…

パーンパカパーン…
パンパカパーン…

キャーおめでとー
お幸せに！
おめでとう！

そんな声があちこちから飛びかう

そう、私達はめでたくスピードゴールインした。

たくさんの仲間に囲まれて。

一年後……

オギャーオギャー

おめでとうございます！元気なオンナの子ですよ！

私と直斗君の愛の結晶が誕生した。

私達は、星空（せいあ）
と名をつけた。

大きな空のように広い心をもち、無数の星のように輝きながら生きてほしい。

そんな意味を込めて。

今では家族三人＋動物達と仲良く幸せに暮らしています。

辛い事もありました。

でもそんな事があったからこそ、今の旦那と恋愛ができ、子供も授かりました。

旦那いわく、私が聖夜君の事を相談してから、良い子だなって思ってくれたみたいです。

控え室でたまたま二人、相談。

これがなかったら、私の人生はまた変わっていたでしょう。

本当に人生は、いつ何があるかわからない…改めて思った。

ありきたりな人生かもしれない。

でも人間は日々、運命の人と出会う為に恋愛し、経験し何かを得る。

運命の人は遠くにいるようで、すごく近くにいるもの。

私は思う

皆さんはどんな恋愛してますか？

笑ってますか？

泣いていますか？

悩んでますか？

人生一度きり。

笑って泣いて

空を見上げ

今日も一日頑張ろう！

ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6676a/

若気のいたり

2010年12月14日18時53分発行